

愛してよ

2005(平成17)年12月22日鑑賞〈東宝東和試写室〉



監督＝福岡芳穂／出演＝西田尚美／塩頸治／松岡俊介／野村祐人／伊山伸洋／アレク／牧野有紗／泉綾香／鈴木砂羽 (マジックアワー＋ステューディオスリー配給／2005年日本映画／107分)

第2章

映画は楽しめるのが一番！

……ダメ亭主と離婚し、10歳の息子と2人で前向きに生きているシングルマザーは、いかにも今風のキャラ。「人生はクジ引きの連続」を口癖とする彼女は、息子をキッズモデルとして成功させるべく懸命に競争しているが、さて肝心の息子は……？ 夫婦のすれ違い、親子の断絶の色が濃くなっている現代社会において、「愛してよ」というメッセージはかなり強烈だが、さて、そのエンディングの賛否は……？

主人公は元気いっぱいのシングルマザー……

この映画の主人公はシングルマザーの中山美由紀（西田尚美）。美由紀の口癖は「人生はクジ引きの連続で、当たりの日もあれば外れの日もある」という女性にしてはユニーク（？）なもの。美由紀がシングルマザーになったのは、沢木亘（松岡俊介）と離婚したためだが、この沢木は、勝ち組・負け組の2分類法から言うと、明らかな負け組。したがって、美由紀は「外れのクジ」を引いてしまっていたというわけだ。

しかし、内心は不安でいっぱい……？

美由紀は今、量販店の家具売り場で働きながら、10歳になる息子のケイジと2人暮らしをしているが、彼女の夢は、ケイジをキッズモデルとして成功させること。そのため、高い月謝と貴重な時間を使って、ケイジにいくつもの習い事をやらせ、今日もオーディションの会場に……。これで成功すれば、ひょっとしてパ

リコレに出られることになるかも……。しかし、それはホントに母親として子供のことを考えた夢なのか、それとも子供との対話のチャンネルをキープするための方便なのか……？

他方、美由紀だってまだ30代の若い女。そうだとすれば、好きな男性を見つけ再婚する権利だってあるはず。しかしそれには、子連れは明らかなハンディキャップ……。「予定を詰め込むのが大好きで、手帳の空欄から運が逃げていく」といつも言いながら、美由紀が日々忙しく動き回っているのは、実はそんな不安な気持ちの裏返しかも……？

ケイジは妙に冷めた少年……？

行動的な美由紀に対して、ケイジは従順で無口……。そして、母親が勝手に決めた教育方針(?)に従っているものの、実はシラケて冷めた少年になっている。仮に「君は何のためにキッズモデルになるための勉強を続けているの?」と質問すれば、その答えは「母親がやれと言うから。ただそれだけ」と答えるに違いない。洋服ダンスにはケイジ用の白い服がいっぱい詰まっているが、これも全て美由紀の好み。ケイジはホントは黒い洋服を着たいらしいのに……。

男の子の10歳といえば、ちょうど難しい年頃。学校でいじめにあい小遣いをせびり取られていることや、母親にかまってもらえないため、万引きしたパンとコロケを食べながら、これも万引きをしたマンガを読んでいることなど、母親の美由紀は知る由もないはず。戦後60年の今のニッポン社会を覆う、暗い親子の断絶の芽がまさにここにありというべきだ。したがって、このまま推移すれば、ケイジが非行少年になること必至……？

かなり身勝手な母親だが……

美由紀は美由紀なりに仕事と子育てと自分の幸せ追求の3つをバランスよく、かつ行動的にチャレンジしているつもり。そして「〇〇べき」論から見れば、それはかなり身勝手なものかもしれないが、今ドキ、「〇〇べき」だと要求しても、それは所詮ムリというもの。むしろ美由紀がとっている精一杯の現実路線に拍手を送るべきなのかも……？

そんな美由紀が次の「勝ち組」になるべく、今つき合っている男性は青山匠（野村祐人）で、彼は明らかに勝ち組風……。そして彼は子連れのまま美由紀と結婚しようと考えてくれているため、美由紀は大乗り気。もちろん美由紀は、子供を育てるために女としての幸せを犠牲にするなんてまっぴらゴメンと考えているうえ、その結婚がケイジのためにも絶対にいいことだと確信していることは明らか。そんな美由紀は、新パパとなる青山との初の「ご対面」となる食事会をセットしたが……？

大人も大変だが、子供たちも……

今は貧乏でも右肩上がりの経済の下、努力さえすれば幸せになれると考えていたのが昭和30年代のニッポンで、それを描いた名作が『ALWAYS 三丁目の夕日』（05年）だった。しかし戦後60年を迎えた今の日本は、モノに溢れ、見かけは豊かそのものだが、リストラや自殺が増え、将来の年金の不安に怯えているのがその実態。さらに11月に突如発覚した耐震強度偽装マンション問題は、専門家への信頼を喪失させただけでなく、国家的システムそのものの崩壊を予感させるに十分なもの。そんな時代状況の中、大人はもちろん大変だが、子供たちだって……。

アキラもシオリもリタイア……？

オーディションを受けたのは1000人だったが、第1次審査で残ったのは100人。さらに第2次審査で残ったのが20人。その中に、「2人で同盟を組もう」とケイジに言ってきた少し年上のアキラ（伊山伸洋）がいた。アキラはバイトが忙しそうだったが、そのワケは……？ またケイジが、キッズモデルの仕事をやめてサラリーマンになりたいと言うと、「お前バカか！」と言っていたくせに、母親が結婚して東京に行くことになると、あっさりと（？）「俺はモデルの仕事をやめてサラリーマンになる」と宣言した。しかし、そのココロは……？

さらに、一緒にピアノ教室に通っていた女の子のシオリ（泉綾香）もラスト選考に残ったが、彼女もいつしかリタイアしていくことに。このように子供たちにもそれぞれ子供なりの家庭事情と悩みがあることが見えてくると、どこか切ない思いも……。

カッコいいタカシ君も……？

キッズモデルというイメージにあまりマッチしない、1人だけ大人の雰囲気を漂わせているのが高原タカシ（アレク）。既にコマーシャルでの実績があるらしく、今回のオーディションは形ばかりで、実は優勝は最初からタカシに決まっているとのウワサも……？ このタカシはたしかにモデルとしてはカッコいいが、かなり性格は歪んでいる様子。それは、どこことなく気になる存在となったケイジとの絡みに端的に現れるが、ビックリしたのはその家庭環境。いかにもいわくありげな雰囲気のステージママだったが、実はその家庭における父親像は……？

「子は親を見て育つ」という格言は、いつの世にも生きていることを実感させるに十分。こんな高原家の家庭崩壊がすぐ近くに迫っていることはたしか……？

「自殺しがっている奴らのアイドル」となったのは……？

この映画には屋上のシーンが再三登場する。そしてそのシーンに不可欠な人物（？）が、「一緒に飛ぼうよ」と声をかけてくる赤いワンピースを着たかわいい女の子のエリカ（牧野有紗）。エリカが「自殺しがっている奴らのアイドル」と呼ばれているのは、エリカ自身が13歳の時に屋上から空を飛んで自殺したためだ。

もっとも、そんなエリカの姿やエリカが呼びかける声は誰にでも見えたり聞けたりするのではなく、心のどこかに「自殺願望」のある人間だけ。したがって、美由紀にはこんなエリカの姿など見えるはずはなく、エリカといつも「対話」しているのはケイジ。映画の中で詳しく語られることはないが、このエリカが親や世間の大人たちに対して言いたかったことも、いっぱいあったのでは……？

1人カッコいい女性デザイナー

この映画では、美由紀とケイジを中心とする登場人物はみんな大きな悩みを抱えているが、たった1人だけカッコよく生きているのが、女性デザイナーの江田島周（鈴木砂羽）。今回のオーディションは彼女のオリジナルブランドの宣伝に起用するモデルを選出するためだから、当然彼女はその審査員としてアレコレ意見を出すという立場にある。

「高原タカシで決まり」という流れの中で、江田島がケイジに興味を持ったのは、第1にケイジがわざわざ白い服を汚して着てきたこと。さて、その理由は……？ そして第2は、「欲しいもの」をパネルに書いて写真を撮るについて、ケイジだけが「なし」と書いてきたことだが、さて、そのココロは……？

子供服に対するセンスなどまるでないと自覚している私だが、この映画を観ていると、たしかに服装のセンスや着こなしの大切さもわかる気が……。映画は、江田島の人物像にそれ以上立ち入らないが、彼女がまれに見るカッコいいキャラであることは明らか。ひょっとすると、この映画を観てファッションデザイナーを目指すことを決めたという人も登場するのでは……？

ラストシーンの賛否は……？

この映画でケイジを演ずるのは映画第2作目で初主演となった塩頸治だが、子供らしくない(?)抑えた静かな演技は特筆モノ。これに対して、元気いっぱいにとくさんのセリフを早口でしゃべる行動的なシングルマザー美由紀を演ずる西田尚美は、既に多くの作品で実績を上げている実力派女優。前の夫沢木が自殺した後、ケイジを連れて食べ放題の店に行き、そのうっぷんばらしをしながら、ケイジに対して「吐くまで食べな！」とのたまう美由紀の姿は圧巻！ そんなこんなのでさまざまなストーリーが展開される中、遂に映画はラストシーンへ……。

美由紀が青山と一緒に東京に行くことになった日は、ちょうど最終オーディションと同じ日。しかし切り替えの早い(?)美由紀は、「結果はどうせ高原タカシに決まっているのだから、行かなくてもいいよね」と、あくまで身勝手……？ 「アキラも僕と同じように東京に行くのだから、僕も……」とケイジもそれを了解していたはずだったが……？

ラストシーンはやはり屋上の上。エリカが招く声に誘われるかのように、今にも屋上から空に飛ぼうとしていたケイジだったが、やっと駆けつけてきた美由紀がそこで叫んだ言葉とは……？ そしてその中で、美由紀が選んだ結論とは……？ このラストシーンが、この映画のクライマックスであることは明らかだが、その賛否は大きく分かれそう。そして私は、どちらかということここで描かれた結末には少し否定的……？

2005(平成17)年12月24日記